大阪大学 2014.4.1 文学部・文学研究科
国際交流 Newsletter vol.4

岡田 禎之 教授

文学研究科　英語学
文学部　英米文学・英語学

阪大に滞在中の留学生の皆さん、これから留学を目指している学生の皆さん、それぞれ目標に向かって順調に歩んでおられるでしょうか。国際連携室の室長を２年間務めさせて戴きました、岡田禎之と申します。連携室での業務は足かけ７年に及びましたが、この間、文学部・文学研究科ではEMプログラムやISAPプログラムをスタートさせ、部局協定校の数も飛躍的に増加して、多くの学生・教員の方を海外から受け入れ、また送り出すことができました。連携室で業務に携わって下さる先生方、助教、事務職員の方、教務係や庶務係、会計係などの事務の方々のおかげです。改めましてお礼申し上げます。

今までの先生方の例を見ていますと、自分の留学経験についてお話しする、ということがこの枠では慣例のようです。しかし残念ながら、私個人には長期留学の経験はありません。短期の２ヶ月派遣などで、言語学の講習会に行ったり、学会発表や資料収集で１～２週間程度行くことなら何度かあっても、それ以上の経験はないのです。(そんな人間が、連携室長をやったり、EMプログラムのチーフをやって、ヨーロッパで開催される会議に出たり、通訳をやったり、挙げ句はドイツの学会のパンフレットにAcademic coordinator of Osaka Universityなどと紹介されていたわけですから、とんでもない話ですが。)

それでも、海外に行っていろんな刺激を受けることはありましたし、また恥ずかしい失敗も色々としています。奈良の田舎で育ち、外国人と話す経験もないままに高校生まで過ごし、大学に出てきて初めて青い目の外国人の先生と授業で対面、片言の英語で話したのが18歳の時でしたが、それでも私は英語の歌が好きで、意味も良くわからないままにいろんな歌の歌詞をまねて小さい頃から口ずさんでいたりしました。おかげで何とか英語のリズムらしきものはイメージできるようになったわけですが、いかんせん、日常会話のnatural speedには（いまだに）ついて行けません。

最初にアメリカに短期研修で行ったとき、現地に着いた翌日の朝に大学構内を歩いていると、ローラースケートをはいた10才くらいの女の子が私に近づいてきました。「水飲み場はどこか教えてちょうだい」と言ってきたのですが、water fountainがwhat a XXXと聞こえて、なんで感嘆文なんだろう？と思いながら聞き返したのですが、なかなか一端思い込んでしまうとうまく聞き取れない。その間も女の子は私の周りをローラースケートで回りながら、同じ質問を（同じスピードで）くりかえしてきます。やっと分かって、「ごめん、昨日着いたばかりだから、どこにあるか分からない」と答えたら、プイと顔を背けて、彼女は颯爽と去って行かれました。朝日に輝く金髪の女の子のローラースケートの後ろ姿を、とても寂しく眺めていたのが私の最初の思い出です。

もうそれからもいろんな場面で恥ずかしいことをやってきていますが、紙面の都合上すべてカットさせて戴きます。とにかくここで私が言いたいことは、この程度の人間でも「何とかなる」と信じてやっている、ということです。是非皆さんも、それぞれの目標に向けて、外へ飛び出して行ってください。陰ながら応援しています。

文学研究科・文学部　国際連携室

国際連携室では、年間を通じて様々な行事や企画を実施しています。留学生だけでなく、文学研究科・文学部の学生を対象としたプログラムもあります。2013年度には以下の行事を実施しました。(*は留学生のみ対象)

■部局間協定校 派遣学生募集　文学研究科・文学部協定校へ交換留学する学生の募集です。
留学開始時期に応じて、一年に２回募集します。

2013年 追加募集　４月１日（月）から４月19日（金）
2013-14年　本募集　８月26日（月）から９月10日（火）
2014-15年　①２月３日（月）から28日（金）、②４月１日（火）から21日（月）

■タンデム学習プログラム　留学生と日本人学生のペアでお互いの言語や文化を学びます。
前期と後期にそれぞれのプログラムがスタートします。

	前期	後期
参加者募集	４月５日（金）から26日（金）	10月１日（火）から18日（金）
ワークショップ	６月19日（水）17：00より	１月27日（水）17：00より
親睦パーティー	７月16日（水）	12月20日（金）

■新入留学生オリエンテーション*　新入留学生を対象としたオリエンテーションです。
４月５日（金）研究生19名（研究科１名、学部18名）、特別研究学生３名（研究科３名）、特別聴講学生７名（研究科１名、学部６名）
９月30日（月）特別聴講学生５名（Erasmus Mundus 留学生、研究科５名）
10月１日（火）研究生５名（研究科１名、学部４名）、特別研究学生１名（研究科１名）、特別聴講学生13名（研究科７名、学部６名）
それぞれの開催日に参加できなかった新入生には、後日個別説明を行いました。

■チューター説明会　はじめて留学生チューターを担当する学生を対象とした説明会です。
４月11日（木）と10月11日（金）。当日出席できない担当者には個別に説明しました。

■英語研修プログラムの募集案内　大阪大学で実施されている語学研修です。

プログラム名	募集時期
エセックス大学　夏期語学研修プログラム	４月上旬から４月下旬
グローニンゲン大学 短期訪問プログラム	４月中旬から５月上旬
マヒドン大学 短期訪問プログラム	４月中旬から５月中旬
モナシュ大学 春季語学研修プログラム	10 月中旬から 11 月上旬

■留学説明会　５月16日（木）　文学研究科・文学部学生を対象とした説明会を開催しました。
学内選考や留学先大学への申請スケジュールや手続、奨学金についての説明の後、交換留学経験者の体験談を聞き、渡航準備や現地での生活、帰国後の就職活動などについての質問にも答えて頂きました。

■「ゆめ基金」応募者募集　交換留学制度を利用する文学部学生を対象とした奨学金です。2013年からスタートしました。応募の機会は年２回、選考基準日は７月31日と２月28日です。

■Erasmus Mundus Euroculture Programme

派遣奨学生　10月17日（木）に奨学生募集の説明会を開催し、10月21日（月）から11月８日（金）の期間で派遣学生を募集しました。11月14日（木）に応募者への面接選考を実施し、Euroculture Programme事務局へ奨学生候補者を推薦しました。

特別講演　10月31日（木）　Alexandre Kostoka教授（ストラスブール第２大学）に“From Ernest Lavisse to《Histoire croisée》”と題してご講演いただき、講演内容について英語やフランス語での質疑応答が交わされました。講演会終了後は親睦会を開催しました。

■ランチタイム交流会　４月18日（木）１年の始めに、昼のひとときを一緒に過ごしています。

■ことばの教室　留学生が講師役を務め、語学や母国の文化、習俗などを学びます。

康盛国さん（博士後期課程）を講師に、韓国の歌やゲーム、年中行事を通じて韓国語を学習しました。前期は５月13日（月）から７月８日（月）までに９回、後期は10月７日（月）から１月27日（月）までに11回、全20回開催しました。

■浴衣教室　７月２日（火）　着付けの先生方に浴衣を本格的に着付けていただきます。留学生の好みに合わせて帯や飾りなどで華やかな浴衣姿に仕上げていただきました。

■親睦パーティー　11月29日（木）に、新しくなった豊中福利会館４階食堂（生協４食）で開催。学生、教職員が一堂に会するこのパーティーは33回目となりました。今年も留学生が司会を務め、留学生による歌、大学のサークル「Raspberry」によるアカペラ、ゲームなどを楽しみました。

■着物体験教室　12月３日（火）女性は振袖を、男性は着物と羽織を着付けていただきます。好みの一着を選んで着付けていただき、思い思いのポーズで写真に納まりました。

□今年度の実施案内はHPやポスターなどでご確認ください。

留学プログラムや留学派遣学生の募集情報はHPやKOANを通じてご案内します。

留学体験記

語学研修

● **柳川　朔さん**（派遣時　学部２年）
エセックス大学夏季語学研修プログラム　（国際交流科目「イギリス異文化体験演習」）

交換留学

● **西本慎之介さん**（留学時　学部３年）　カリフォルニア大学デービス校(大学間協定校)
● **村松真衣さん**（留学時　学部３年）　マンチェスター大学（部局間交流協定校）
● **小野遼太朗さん**（留学時　学部４年）　ハイデルベルク大学（部局間交流協定校）

留学生

● **Lopez Liendo Valentina**　比較文学　交換留学生（ハイデルベルク大学）
● **陳萍さん**　博士前期課程　日本語学

ひと夏のイギリス留学

● 音楽学・演劇学専修２年　柳川　朔

一人きりの小さな下宿アパートの一室で目をつぶると、寮のキッチンで語りあう仲間たちの姿と、キャンパス内の広場に集った彼らの笑顔がまるで昨日のことのように鮮明に蘇ってきます。

イギリスはコルチェスターのエセックス大学。ひと夏の留学生活をこの大学で過ごしたのはもう半年前のことです。

21年のわずかな経験の中でも少しだけ知っていることがあります。人は何か大きなことを経験したとき、それを言葉で完璧に表すことはできないということ。どれだけ美しい言葉や表現でさえ、それは陳腐で、経験したことには遠く及びません。時として言葉は無力です。どんな言葉を選んでも表せやしないけれど、それでも魔法のようなイギリスの日々は心の中で今も燦然と輝く誰にも盗めぬ大切な思い出です。

国も年齢も境遇もバラバラな学生たちとの授業のこと、寮での自炊のこと。誰もいないオールド・トラフォードで叫んだこと、憧れていたリバプールで訛りに苦しんだこと。電車の遅れで終電を逃したこと。旅行先のブリュッセルにて一人、バーで飲み明かしたこと、パリでぼったくられてのちに貧困にあえいだこと。なけなしのお金で買ったギターでストリートライブに繰り出し小銭を得たこと。すべてが心の中でキラキラ輝いています。

そして何よりそれまで出会うことのなかった国の学生との出会い。部屋に飾られた世界地図を眺めては、帰国した今でも続く友情を噛み締めています。英語のみならず、コミュニケーションを積極的にとることの素晴らしさを教えてくれたのは他ならぬこの留学でした。それゆえ帰国後、多くの留学生と友好関係を築きあげることができたのだと思います。一つ一つの出会いが僕の日々に素敵な色を添えてくれました。それまで僕は知りませんでした。出会いがこんなにも嬉しいものだということを。またこんなにも悲しいものだということも。出会いと同じ数だけ別れがある。こんな当たり前のことさえも今は信じたくありません。

でも、いつかまた会えるはずです。そうどこかで信じる人がいる限り。

今日も世界のどこかで僕の知っている人たちと、僕の知らない人たちがあくせく頑張っています。それを知ることができただけでも少し大人になれた気がしています。

世界はきっと僕が思うよりずっと広く、そしてずっと狭いものだと感じました。世界を見ることで感じた日本が見習うべきところと、日本にしかない素晴らしさ。あのきらめく5週間が気づかせてくれた希望を抱き、日々を掴み取っていくことができればと思います。

二重の虹 at リバプール

最後に、リバプールのビートルズミュージアムに飾られた一編の詩と、外にかかっていた絵葉書のような二重の虹を僕は忘れません。

"In the end, the love you take is equal to the love you make.."

下を向いていては頭の上にかかる虹にさえ気がつきません。もらったすべての優しさで新しい優しさを紡いでいくことが今の僕にできる最大の恩返しに他なりません。

素敵な日々に感謝し、前を向いて歩いていきたいです。

キャンパス内のクラブでの赤い僕

アメリカ・数学・情熱

● フランス文学専修４年　西本 慎之介

私はアメリカのカリフォルニア大学デービス校に11ヶ月間留学しました。おそらく他の留学生と大きく異なっている点は、私が留学先で数学と統計学を学んだことです。私は日本ではフランス文学専攻ですが、自分の将来に対する不安と偶然の出会いにより、アメリカで数学と統計学を勉強しました。現在は理系大学院に進学するため勉強をしています。この留学体験記では私が留学した理由、留学先の街や大学の様子、留学先での勉強、そして帰国後の留学の感想について書きます。それらを通してなぜフランス文学専門の私がアメリカへと留学し、理系大学院進学を目指しているのかについて説明します。

私がカリフォルニア大学への留学を決意したのは、自分の将来に対する不安と、人や学問との偶然の出会いです。私は大学入学当初から自分の将来に不安がありました。なぜなら私が、文学に過剰な期待を抱いて大学に入学したためで、現実の堅実で精緻な文学研究と自分の理想との違いに苦しんだためです。

「このまま自分は文学の勉強を続けていいのだろうか。」と悩む中、偶然読んだ哲学書を通して数学と統計学に興味を持ちました。自分でそれらの勉強をすすめ、もっと勉強したいと思うようになりました。アメリカへの留学を決めたのは、私が鞄持ちをしていた政治家の影響です。彼は、アメリカの大学を卒業しており、その刺激的な学生生活をよく私に話してくれました。このような経験から私は「アメリカに留学したい。そして数学と統計学を勉強したい。」と思うようになりました。

私が留学したカリフォルニア大学デービス校はサンフランシスコから車で東に２時間の場所にあるデービスという街にあります。キャンパスや町には緑が多く、野生のリスが街を走っています。また雲のない青空が広がる日が多く、まるでルネ・マグリッドの絵画の中に迷いこんだ気分になります。そして開放的で親切な人が多いのも驚きました。たとえば、私が図書館でくしゃみをすると知らない人から”Bless you!”と声がかかります。穏やかで開放的なカリフォルニアで留学生活を送れた私は幸せでした。

留学中、私は数学と統計学の勉強にのめりこみました。文系の私が大学数学の勉強を理解できたのは、アメリカの大学に助けられたからです。特に簡潔な言葉で本質的な説明をする教授には感動しました。印象的だったのは、積分の第一回目の授業です。教授はペットボトルとスニッカーズ（棒状のチョコレート菓子）をもってきて言うのです。「積分とは何か。簡単だ。このスニッカーズでペットボトルの体積を計ることだ。どうすればよいか。ペットボトルをスニッカーズでいっぱいにすればよい。そして、スニッカーズ一本の体積と本数の掛け算でペットボトルの体積がわかる。もちろん、ペットボトルには曲線部分がある。そこには直線のスニッカーズが入らない隙間ができる。その時はスニッカーズを半分に切るのだ。するとスニッカーズは細くなり、隙間が少し埋まる。これを応用し、半分に切る作業を無限に繰り返す。そうするとスニッカーズ無限に細くなり、無限に隙間が埋まる。このように考えれば、スニッカーズという直線でペットボトルの曲線を含んだ体積は表現可能だ。これが積分だ。」このように魅力的な教授をはじめ、留学先の大学の合理的なシステムにも助けられ、私は理系の学問に魅了されて勉強に熱中しました。ひどいときは部屋を出るのが面倒になり、気がつけば一週間シャワーを浴びていないという時さえありました。

勉強に熱中した留学生活も、帰国して冷静に判断すると失敗といえます。つまり、得たものに比べて失ったものが大きいのです。たとえば、私は留学先で専攻を変えたため、単位が足りず、卒業を一年延ばします。また、正規の留学期間を終えてもアメリカに残って勉強を続けたので、お金も失いました。さらに英語もできるようになっていません。そもそも勉強だけなら日本でもできたはずです。失ったものに比べて私が得たものは少なく、「数学と統計学を学んだ経験」だけです。しかしこの経験は、自分の進路を変化させました。数学と統計学の勉強を続けたくなり、現在は数理的に言語を研究する自然言語処理を学ぶため、理系の大学院進学を目指しています。私の留学生活が「楽しかった。勉強になりました。」という自己正当化のためだけの経験で終わるのか、本当に意味あるものになるのかはこれからの自分の努力にかかっています。

以上の文章では私がアメリカに留学し、数学と統計学を勉強したことを説明しました。留学した理由は、自分の勉強に対する不安と、人や学問との偶然の出会いでした。客観的には、留学生活で失ったものは大きく、準備・検討不足による失敗だと言えます。しかし留学先での勉強は自分の進路を大きく変えました。そしてこの進路変更も自分に新たな困難をもたらすでしょう。しかし、それがどのような困難であっても、挫折したり、落ち込んだりしながら、乗り越えていけると私は信じています。その確信は、自分の興味を貫いて勉強した留学生活に支えられているのです。

マンチェスター大学への留学を終えて

● 英米文学・英語学専修４年　村松　真衣

私は2012年８月から10ヶ月間、イギリスのマンチェスター大学へ留学をしました。長いようであっという間の、本当に貴重な日々でした。

世界の異なる文化や価値観に触れてみたいと留学を決めた私ですが、いざ出発の日が近づくと不安ばかりが募り、なぜ応募してしまったのだろうとさえ思うほどでした。しかし帰国した今、あの時留学を決断して本当に良かったと思っています。

留学中の生活は自分が想像していたよりも厳しいものでした。授業は議論やグループワークが中心のものが多く、英語が十分に話せなかった私にとってはとても大変でした。ある授業で、グループで自由にテーマを設定しパワーポイントにまとめるという課題が出ました。現地の学生たちとの議論に最初は全くついていけず、発言も出来ず、情けない気持ちになるばかりでした。しかしながら、人一倍テーマに関する情報を収集するとともに、英語が十分に理解できないことを打ち明け、ゆっくりと話してもらうなどしたことで、少しずつ議論に参加できるようになりました。３ヶ月間のグループワークの後、あなたと一緒にできて良かったとメンバーに言われたとき、こんな自分でもグループに貢献できたのだと嬉しかったのを覚えています。困難なことだったからこそ、乗り越えられたことに大きな達成感を得られました。

マンチェスター大学には180もの国から学生

が集まっています。イギリス人だけでなく、世界のあらゆる国の人々と交流できる環境があります。寮では、特にマレーシア、中国、アメリカの学生たちと仲良くなり、朝晩と食事を共にし、食事が終わればそれぞれの部屋で気の済むまで話し、休日には互いの国の料理を作り合ったりとまるで毎日が修学旅行のようだったなと今では思います。国が違えば、文化も価値観も違い、毎日顔を合わせていると、お互いの考え方の違いから衝突しそうになることもありましたが、世界には本当に様々な考え方の人がいて、その違いの面白さ、そしてそれを受け入れることの大切さを学びました。

彼女たちとは今でも連絡を取り合っており、これから互いの国を訪れることもあるかもしれません。留学で一生の友人に出会えたことを本当に嬉しく思います。

今まで不安なことがあると、「なんとかなる」というのが自分の口癖でした。今回の留学も不安でいっぱいでしたが、行ってしまえばなんとかなると言い聞かせていました。留学を終えて口癖は、「なんとかする」に変わりました。到着した初日に寮の電球から煙があがったこと、新しい寮で自分の部屋がないと言われたこと。日本でなら簡単に解決できることが、海外では非常に難しく感じました。行動しなければ状況は変わらないことを思い知り、一つ一つやり遂げていくなかで、困難な状況にあっても自分でなんとかする、できるという自信がつきました。

こうして振り返ってみると、留学に挑戦することができて幸せだったと感じます。留学の機会を与えていただけたことに本当に感謝しています。

フラットメイト全員で

「いきあたりばったり」

● 日本学専修４年　小野 遼太朗

私にとって、この留学は初めての外国体験であった。パスポートも、今回の留学のために初めて取得した。いわゆる多数派が勧めるような、短期留学をして、現地の情報を集めて…等という「段階論」を完全に無視した形で留学に出かけた。他の留学経験者と同じことを書いても面白くないので、突発的留学経験者の体験を、私は書こうと思う。

みなさんは留学することが難しいものだとお考えではないだろうか。残念ながら、それは間違いである。精神論を押し付ける気はないが、やる気さえあれば、それで十分だと思う。行ってみたいという気持ちが、何よりも大事だと思う。私は、「日本という国が諸外国からどのように見られているか」というテーマを持ってこの留学を希望し、学び、帰ってきた。留学中に学んだことで最大のものは、大学で学んだ内容ではなく、生活上で身に付けた、差別に対する態度である。

私の場合は、順番待ちの列に横入りされたり、訳もなく美術館の係員に怒鳴られたり、道端で突然殴られたり、犬をけしかけられる程度のことであったが。そういった差別に毅然と立ち向かう力は、日々の暮らしで身につけて来られたと思う。劣勢に置かれながらも違和感をしっかりと言葉という形で表明し、相手と議論することは、恐怖心から出来ない人が多い。私も最初は議論から逃げていた。しかし、それでは人権も自由も侵され放題である。人間の尊厳とは一体何か、人権とは一体何か、自由とは一体何か考えたとき、これに反論しない理由は無いと思う。話せば分かる人は多い。差別に対しては、一発目の態度が重要だと、現在は思っている。

語学の重要性は、今の内容からも分かると思う。半端な語学力で行くのは、良い経験ではあるものの、一般論的にはやはり、無謀だと言った方が良いだろう。ビザを作るとき、入学手続きをするとき、全てはドイツ語である。話せないと、役所の方々も困惑してしまうのである。しかし、語学力が半端であるからこそ分かることも、ありそうである。たとえば、日本において日本語が話せない方々が抱える悩みを理解することは、経験を持たない人にしてみれば非常に難しいことであるが、自分自身が無謀な留学を体験することによって、その悩みに対する解決の糸口が見つかるかもしれない。

難しいことは言いたくない。行ってみたいと思ったら、行ってみた方が良い。大学には卒業という期限がある。誰が(私が)何と言おうと、留学はあなた自身が決めることである。大学は経済的にも多大な援助の道を示してくれる。何度も書くようで申し訳ないが、悩む時間があったら、行動してみよう。行動すれば、何かしら体験できるはずだ。是非とも、留学という選択肢を利用してほしい。また、男性の留学率が女性に比して低いので、より強く男性の方々に留学をお勧めする。自分が立っている、その足元を見つめよう。

My Semester at Osaka University

● 比較文学　特別聴講学生　Lopez Liendo Valentina

My exchange at Osaka University has certainly been a very interesting experience. I can honestly say that I have learned a lot, and advice anyone who is interested to take the chance and study a semester abroad. Coming to Osaka was my first time to travel

to Japan also, so there were many different things for me to learn. From registering at the City Office to opening a bank account – all in Japanese – all these transactions were little hurdles everyone has to pass if one wishes to spend time abroad. Even signing up for classes becomes difficult in a foreign language. However, it is nothing that cannot be overcome, particularly taking into account the kindness and patience of the Osaka University International Affairs Office staff, as well as the help provided by the Support Office.

Born in Venezuela, I grew up in Germany, so I can say fairly confidently that I am used to moving between different cultures. Yet, studying somewhere else turned out to be a very unique experience for me, since one can experience the different educational systems and approaches first hand. I found it interesting to learn that cultural differences cannot only be felt in every day interactions, but that differences can also be felt in how institutions are organized, in how they work and function. To provide an example: I am used to writing term papers at the end of the semester alone; these term papers being an average of 12 to 15 pages, longer than the レポート I have been required to write here in Osaka University, some of them to be handed in at mid-term, and at the end of term as well. Moreover, relationships like the sempai-kohai one are also something that does not exist in Germany, and thus, it was very interesting for me to experience Japanese campus life first hand during this semester. Not to mention that I had the opportunity to meet so many interesting people – teachers, fellow exchange students, as well as the Japanese students I met and made friends with all made my stay very enjoyable.

Additionally, I found the classes offered at Osaka University highly interesting. I am grateful that I had the opportunity to audit Professor Hashimoto's class on Orientalism and Comparative Literature, during which I not only deepened my knowledge on the issue, but also, as an added bonus so to speak, learned the Japanese vocabulary to discuss these issues. I consider myself lucky to have been under Professor Hashimoto's supervision during my stay at Osaka University; he has provided me with helpful guidance for my future studies and my future research for my graduation thesis.

As for my remaining stay in Japan, I plan to travel. I came to Japan in time to witness its beautiful autumn, and went to Kyoto for momijigari, which I greatly enjoyed. I plan to travel to Tokyo in the next month, once the weather allows it, but before I plan to visit Hiroshima and several places in the region, such as Nara and Kyoto. I hope it warms up the next few weeks enough for me to be able to enjoy the sakura blossoms. And if not, I am sure this will not be my last time in Japan. I am very thankful for this opportunity, and hope to be able to return to this wonderful country soon.

新たなスタートに向けて

● 日本語学　博士前期課程　陳　萍

あっという間に、阪大での三年間が過ぎてしましました。はじめて豊中キャンパスにある日本語学の研究室を訪ね、先生と先輩たちに挨拶したときの気持ちは今も鮮明に覚えています。また、同期生と一緒に大学院入学試験に励んでいた日々もしばしば頭に浮かび上がります。

周りの同期生と違って、私は修士課程を終えて就職することを決めました。自分の研究分野に興味を持たなくなったからではなく、学校という象牙の塔から歩み出し、一人前の社会人に向けて自分自身の力で頑張っていきたいからです。

就職活動をしていた頃、面接官によく二つの質問を聞かれました。どうして日本に留学しようと思ったのですか。留学生活を通して、最も成長した部分はどこですか。それがきっかけで、三年間の留学生活を振り返ることができました。

中国の大学を卒業してから、現代日本語文法に大変興味を持ったため、大阪大学文学研究科に進学することを目標に来日しました。はじめて日本語学の研究室を訪ねると、まず目に映ったのは巨大な本棚！ずらりと並んでいる、見たことも聞いたこともない書籍を見て、自分は院試に合格できるかと一瞬心細くなりました。

幸いなことに、一年間の受験勉強を経て、無事に院試に合格し、修士課程に進学しました。その後、学習とアルバイトで充実した日々が続きました。文学研究科では、分野間の融合や交流を重視した履修制度を設けているため、大学院では、日本語学講座の授業だけではなく、英語学や文芸学など、さまざまな授業を取ることができました。また、定期的な研究発表も学習生活の大半を占めました。最初の頃は、頻繁に行なわれる研究発表に慣れなかったため、大きな不安とストレスを抱えていました。その後、指導教員とのコミュニケーションや先輩との相談などを通して、だんだん自己調整できました。そして、先生や先輩たちが苦労を重ねつつ真剣に研究に取り組んでいる姿も、私にとって大きな励みでした。研究がうまく進まなかったり、不足や間違いを厳しく指摘されたりすることがよくありましたが、そのような状況に対し、ひたすらに落ち込むのではなく、どのような姿勢で対応していくのかをまず考えるようになりました。

また、留学生活に欠かせないことは何かというと、やはりアルバイトでしょう。母国ではほとんど経験したことがないため、アルバイトに対しては不安より期待のほうが大きかったです。しかし、留学生である私にとって、アルバイトを探すのは決して容易ではありませんでした。ほぼ一ヶ月もかけてやっと初バイトを見つけたのです。また、仕事中、言葉と文化が原因で、お客さんやスタッフを困らせてしまったことも少なくありません。しかし、頼れる人は自分しかいないという覚悟のおかげで、疲れや辛さを感じながらも最後まで頑張ってきました。

あと一ヶ月ぐらいで、私はほぼ毎日通っていた阪大を離れることになります。この大学で私が学んだ最も重要なことは何かというと、客観的に自己評価することと、積極的に他人の意見を尋ねることという二点ではないかと思います。それは、とりわけ、常に学ぶ姿勢でおられる優秀な研究者である指導教員から学んだことだと思います。「論文は自分一人で書けるものではない」という先生の言葉が最も印象的でした。つまり、研究にあたって、自分がわかっていることと、わかっていないことを明確に認識し、その上で、他人のアドバイスやコメントを積極的に求めるというスタンスが非常に重要であるということです。今後、私は研究とは全く違う仕事に就きますが、この言葉を常に心がけ、人生を歩んでいきたいと思います。

学生派遣・受入れのデータ

留学派遣（2014年2月10日付、休学事由「留学」を含む）

研究科　21名

在籍学年	
後期３年	12
前期２年	5
前期１年	1
修士２年	3

渡航先	
アメリカ	4
イギリス	4
ドイツ	4
オーストラリア	2
韓国	2
中国	2
チェコ	2
フランス	1

学部　13名

在籍学年	
２年	1
３年	5
４年	7

渡航先	
イギリス	6
アメリカ	2
オーストラリア	1
ドイツ	1
トルコ	1
フィリピン	1
フランス	1

語学研修等（2014年2月10日付、大学主催の研修参加者および届出のあったもの）

研修名等	研究科	学部
モナシュ	-	6
エセックス	-	3
グローニンゲン	-	4
GLOCAL	1	
ボローニャ	1	1
その他	1	4

留学生受入れ（2013年4月から2013年3月まで、OUSSEP・Maple参加者を除く）

研究科	
博士後期課程	22
３年	13
２年	4
１年	5
博士前期課程	27
２年	13
１年	14
修士課程	7
２年	3
１年	4

研究生	5
特別研究学生	7
特別聴講学生	18
学部	
４年	2
３年	1
２年	2
１年	4
研究生	24
特別聴講学生	15

出身国・地域	
中国	55
韓国	30
ドイツ	11
台湾	10
イタリア	3
ブラジル	3
フランス	4
ロシア	3
アメリカ	2
スウェーデン	2
アルゼンチン	1
イスラエル	1
イラン	1
インド	1
インドネシア	1
タイ	1
チェコ	1
ブルガリア	1
マレーシア	1
メキシコ	1
ルーマニア	1

在籍専門分野・コース、専修

研究科						学部			
	博士後期	博士前期・修士	研究生	特別研究学生	特別聴講学生		学部	研究生	特別聴講学生
哲学哲学史					2	哲学・思想文化学	1		
現代思想文化学		1							
臨床哲学	2					倫理学	1		
日本史学	1		1			日本史学		1	1
東洋史学	1	1	1			東洋史学	1	4	1
西洋史学					2	西洋史学			
考古学		1				考古学			
日本文学	3	6		4	2	日本文学		3	1
比較文学		2			1	比較文学	1		1
国語学	2	1			1	国語学		2	4
中国文学		1	1			中国文学		1	1
英米文学	1					英米文学			
演劇学	1					演劇学		1	
美学		3				美学	1	2	
演劇学		1				音楽学		1	
美術史学	2				1	美術史学			
日本学	5	4	1	1	4	日本学		1	1
日本語学	4	6		2		日本語学		7	5
共生文明論		2				共生文明論	-		
アート・メディア論		2				アート・メディア論	-		
文学環境論		3	1			文学環境論	-	1	
その他					5	未配属	4		
	22	34	5	7	18		9	24	15

教員派遣・受入れのデータ

教員海外出張・研修（2014年2月10日現在）

海外出張　延べ111名、124件

中国	23	フランス	4	オランダ	1
イギリス	14	イタリア	3	カナダ	1
アメリカ	12	シンガポール	3	スイス	1
韓国	11	オーストラリア	2	スウェーデン	1
ドイツ	11	カンボジア	2	セルビア	1
台湾	8	ギリシャ	2	デンマーク	1
タイ	6	スペイン	2	トルコ	1
ポーランド	5	ベトナム	2	フィンランド	1
インド	4	インドネシア	1	ブルガリア	1

海外研修　延べ18名、26件

フランス	5	アメリカ	1	チェコ	1
韓国	4	イギリス	1	ノルウェー	1
オランダ	3	インド	1	ハンガリー	1
タイ	2	オーストリア	1	ベルギー	1
ドイツ	2	スロベニア	1	ロシア	1

外国人招へい研究員の受入れ（2013年4月から2014年3月）

1. **陳　文輝（Chin Wenhui）**　**中国　2010年10月1日～2013年9月30日**
在外白話　文学資料の調査、ならびに元朝期戯曲文学の共同研究（高橋文治教授受入れ）

2. **周　萍（Zhou Ping）**　**中国　2012年7月1日～2013年6月30日**
異文化コミュニケーションと文化習得に関する研究（青木直子教授受入れ）

3. **Tanaka Kathryn Marie**　**アメリカ　2012年8月7日～2014年10月6日**
ハンセン病と現代日本文学（出原隆俊教授受入れ）

4. **劉　継萍（Liu Jiping）**　**中国　2013年3月1日～2013年8月31日**
日中文化の比較研究（川村邦光教授受入れ）

5. **Kudoyarova Tatiana**　**ロシア　2013年4月1日～2015年3月31日**
現代日本語の略語に関する研究（石井正彦教授受け入れ）

6. **朴 秀娟（Park Sooyun）**　**大韓民国　2013年4月1日～2015年9月30日**
南米における韓国系移民の言語接触に関する研究（工藤眞由美教授受入れ）

7. **張　偉品（Zhang Weipin）**　**中国　2013年8月1日～2014年7月31日**
1.日本に保存される中国戯曲文献、及び1949年以前の関連新聞記事の調査研究。
2.日本伝統演劇の現状に関する調査。（中尾薫講師受入れ）

8. **孫　栄奭（Son Youngsuk）**　**韓国　2013年7月1日～2013年8月31日**
日・韓表現行動に関する先行研究の統計的検証（石井正彦教授受入れ）

9. **莊　千慧（Chuang Chien-Hui）**　**台湾　2013年4月1日～2014年3月31日**
東アジアにおける心霊研究の伝播と受容について（橋本順光准教授受入れ）

10. **張 麗静（Zhang Lijing）**　**中国　2013年4月1日～2014年3月31日**
谷崎潤一郎作品の研究（出原隆俊教授受入れ）

11. **Mohammad Moinuddin**　**インド　2013年4月1日～2014年3月31日**
志賀直哉作品の研究（出原隆俊教授受入れ）

12. **方　艶（Fong Yan）**　**中国　2013年10月20日～2014年10月19日**
中国と日本における神話記述の伝統とその変容（浅見洋二教授受入れ）

13. **李　吉鎔（Lee Kilyoug）**　**韓国　2013年10月1日～2014年9月30日**
日本語のコミュニケーション能力の習得及び維持に関する研究（渋谷勝己教授受入れ）

14. **白　玉冬（Bai Yu Dong）**　**中国　2013年11月18日～2015年11月17日**
中央アジア・西ウイグル王国期におけるウイグル人の移動とウイグル文化の伝播に関する研究（荒川正晴教授受入れ）

15. **崔　恩珠（Choe Eunju）**　**韓国　2011年10月1日～2014年9月30日**
在日大韓基督教会に関する資料調査および研究（川村邦光教授受入れ）

16. **Pachciarek Pawel Lukasz**　**ポーランド　2013年10月11日〜2014年11月2日**
草間彌生研究、ことにその文学作品の美術活動との関係について（上倉庸敬教授受入れ）

17. **楊　洪俊（Yang Hongjun）**　**中国　2013年10月1日〜2014年9月30日**
日本近代文学に関する研究（出原隆俊教授受入れ）

18. **Kostka Alexandre**　**フランス　2013年10月30日〜2013年11月8日**
Euroculture Programme によるEU圏内から本学への派遣学生の指導。
フランス19世紀における日本の文化表象に関する講演。（山上浩嗣准教授受入れ）

19. **劉　素桂**　**中国　2014年1月9日〜2015年1月8日**
井上靖を中心とする日本近現代文学に関する研究（出原隆俊教授受入れ）

着物体験教室

小誌は大阪大学文学研究科・文学部の留学生や国際学術交流の主な事項を記録し、広報することを目的としています。
各研究室をはじめ、関連する諸方面の状況などお知らせいただけましたら幸いに存じます。

編集・発行　文学部・文学研究科　国際連携室
岡田禎之・西田充穂・内田多鶴
発　行　日　2014年３月31日

〒560-8532　豊中市待兼山町１-５